

16

江戸時代の医学書にみる結核観の変遷

鈴木 則子

奈良女子大学生生活環境学部

江戸時代の結核は、「労咳」、「骨蒸」、「傳屍」、「鬱症」、「ぶらぶら病」などと様々な呼称をもち、それぞれが当時の結核観を反映していることは、先行研究がすでに指摘するところである。病因として遺伝・伝染・心労・房勞が考えられ、また患者の特性として「らうさいかたぎ」と呼ばれる陰気な性格や性的欲求不満、房事過度、ヨーロッパの結核観と近似した「佳人薄命」という見方があったこともわかっている。

では、上記のような医学および一般社会の結核観はいつごろから登場し、またどのように変化していったのだろうか。それらの変化の社会的背景は何だったのか。階層による結核観の違いはなかったのか。ジェンダーやセクシュアリティとの関係をどのように捉えるべきか。報告者は医学書を主要な史料としながら、これらの問題関心に基つき、江戸時代の結核観が当該社会のあり方に規定され変容していく状況について研究している。今回はこういった問題関心のなかから、結核患者を「才人」の病とみなしたり、結核の症状を「佳人」と結びつける意識をとりあげ、それらが登場する時期とその社会的背景について検討を加える。

まず「才人」説だが、香川修庵(1683-1755)の『一本堂行余医言』(1788年刊)は、若者の中でも「近時この證を患う者、多くはこれ敏捷伶俐の人にして、温重簡黙の徒は反(ママ)って鮮し」云々と、18世紀前半の新しい傾向として、伸び盛りの若者で「敏捷伶俐の人」が抑鬱を感じて発病するという説を記す。ちなみに修庵は、大量の灸を用いた治療によって「此の證の専門名家」となったと自ら書いており、結核の豊富な臨床経験を誇っている。

修庵が活躍した享保期は、元禄という高度経済成長期における階層移動の時期を経て、社会の固定化が進む時期である。そのような時代に優秀な若者が才能を発揮できず、鬱屈している状況を指摘しているのだろう。修庵と同時期の香月牛山(1656-1740)もまた著書『牛山活套』(1779年)で、病因として「氣鬱」を強調し、特に「官吏」・「室女」・「後家」・嫁のストレスの多い生活をあげる。ここにも、この時代の官僚制の硬直化や、庶民に至るまでの「家」成立といった社会的流動性の喪失と抑鬱との結びつきを見て取ることができる。

一方、結核を女性美と結びつける発想は18世紀後半、和田東郭(1742-1803)著『蕉窓雑話』(1821年)に見られるのが早い例である。症状として、眼中に精彩があり、美しすぎる時は「甚だ悪」く、これは「労症のしまいくち」などには特に多いとしている。肩背などは痩せても「顔色」は依然としてあり、婦人は特に顔色甚だ美しくなる者あり、とも記す。こちらはいわゆる「帯桃花」という症状を指すだろう。結核症状としての「帯桃花」に関する記述は近世以前から中国医書に載るものの、やせた身体に輝く瞳と桃色の頬をもった女性に美を見いだすのは、東郭の時代の新しい感覚である。

近代の竹久夢二の描く結核美人を想起させる姿だが、明和・安永期(1764-81)に一世を風靡した「春信様式」と呼ばれる美人画も、ほっそりとした美少女を描く。18世紀後半は浮世絵の黄金時代に相当し、鈴木春信以降、鳥居清長、喜多川歌麿、鳥文齋栄之といった浮世絵師が続き、彼らの描く美人像は服飾のスリム化に伴って、さらに細長い体躯を持つようになる。結核の病状と時代が求める女性美とが重なったのが、18世紀後半であったと言えよう。